

樅の木の子孫たち 第一部

燃える水

小城ゆり子

## 序

江戸時代の初期、戦国時代が終わり、徳川政権がほぼ安泰となった頃、仙台藩六十二万石伊達家に、騒動があった。若い藩主伊達綱宗が『遊蕩のため』逼塞を命じられ、跡を継いだ幼子の藩主亀千代（後の綱村）も毒殺されそうになり、伊達家の本家を奪いたい一門の伊達兵部が、家老の原田甲斐と共謀し、一連の騒動を引き起こした、とされている。兵部を暗殺しようとした者もいた。

一六七一年（寛文十一年）五月、反兵部派の伊達安芸が、幕府に訴えを起こし、幕府大老酒井うたのかみ雅楽頭忠清邸に、兵部、甲斐、安芸たちが呼び出された。その席で、怒り狂った甲斐は、安芸に斬りかかり、安芸は即死、続いて甲斐も酒井家の家来に斬り殺された。

この後、伊達六十二万石は、幕府より安堵されたが、原田甲斐の一族は、悲惨だった。四人の息子たちは、切腹を命じられ、まだがんぜない孫たちまで、殺された。

伊達兵部は、領地を没収され、土佐に配流された。

このように原田甲斐は、公式の記録では兵部と手を組んだ悪人とされており、人形浄瑠璃や歌舞伎、『伽羅めいぼくせんだいはぎ先代萩』の世界でも、大悪人とされている。

小説家山本周五郎は、この定説をくつがえし、小説『樅の木は残った』で、この原田甲斐こそ、わざと兵部のふところにとびこみ、彼の悪巧みを阻止しようとした忠臣である、と描いている。彼は、幕府の外様大名大藩取り潰し政策に抗して、なんとか幕府に口実を与えるような騒動のなきよう、事件をもみつぶしていった人物として描かれている。

最後も、酒井邸で、安芸と甲斐は大老酒井の手の者に殺されるが、甲斐はその虫の息で、この殺人は自分がやったのだ、そういうことにしてくれ、と遺言して、死ぬ。

そして、その働きに感動した幕府側用人久世大和守によって、仙台藩は安堵される。

また、甲斐には、おくみそばめという側女がおり、彼女の産んだかよという娘もいた。

かよのその後については『樅の木は残った』には書かれていないが、彼女は、伊達騒動の際にはまだ八歳、その後、逃げて行った越後の農村で、すくすくと育つ。

この女性が、この物語の筆者の祖先である。

筆者は、祖先たちのことを書いてみよう、と思う。亡き周五郎氏も私がこれを書くことを許可してくれるだろう。

## (1) 江戸で

五月、春が過ぎていく。早朝、まだ薄暗い時間である。

昨夜、苦しんで一睡もできなかった甲斐は、早々に雁屋を訪ねた。彼を助けてくれる者は、他にはいない。

雁屋信助は、江戸は日本橋で、海産物問屋と廻船業を営んでいる。朝早くから忙しく立ち働いているが、この日は、まだ夜も十分明けぬうちに、原田甲斐がやって来たので、驚いた。

「何事でございますか？」

甲斐は黙っている。

信助は、甲斐を奥の座敷に案内し、家族も奉公人たちも追いやって、一人、彼と対面した。甲斐はいつも穏やかなのに、今日に限って、暗い、切羽詰った表情をしていた。

「密書を返してくれないか」

「あっ……」

密書とは、大老酒井雅楽頭と伊達一門の伊達兵部との間に交わされた誓紙である。これを預けられて以来、信助は中身も決して読まず、大切に奥の小箱にしまっておいた。

「これでございますか？」

信助は、奥から密書をとってきて、渡す。

「これが、とうとうお入用になったのでございますか？」

「うむ」

甲斐は小さくうなずく。

これは、幕府が伊達六十二万石を取り潰し、半分の三十一万石を兵部に与え、あとはそれぞれ適当に配分する、という誓紙である。兵部は自分の分は大事にしまっているだろうが、この酒井雅楽頭の方は、甲斐の家来が酒井家の奥女中となった知人女性に盗み出してもらい、甲斐が、安全な隠し場所として雁屋信助の許に託していた。

このような誓紙は、何の力も持たないのだが、これが原田甲斐が持っているとなると、大変なものになる。伊達六十二万石を取り潰そうとする幕府の陰謀が明らかにされてしまうのだ。

いよいよ今日が、これが必要な日か……。暗く考え込んでいる甲斐の前で、信助は身も引き締まる思いだった。

「今まで、すまなかった。とうとうあなたの恩に報いることもできなかった……。私のことで、あなたにまで公儀のお咎めが及ぶことはないと思うが……」

「いや、めっそももないことでございます。私はお殿様のお役に立てただけで、うれしゅうございました」

「ほんとうにどれだけあなたに助けられたか。深く感謝しておる。湯島の家も、すべて、あなたに頼っていた。おくみとかよのことを、頼む」

「それはもう、おくみ様は、私の実の妹、かよ様は私の姪でございますから、私の力の及ぶ限りのことはさせていただきます。この江戸には、各藩から、大名衆やご家来衆が大勢来ていらっしやいますが、殿様のような心おやさしい方は、他にはおられません。私は、殿様とお近づきになれただけで幸せ者でした」

信助が呼ぶと、妻の千代が、朝がゆを持ってきた。

「さあ、どうぞ。腹が減っては戦はできぬ、とやら申しますので」

「かたじけない。あなたのこと、私は黄泉の国に行っても、決して忘れないぞ」

「ありがとうございます」

甲斐が去ってから、信助は妻の千代を呼んだ。

「今日は、これから湯島に行って来る。おくみとかよ母娘を連れて来るから、お前もそのつもりでいてくれ」

「はっ、はい」

千代は素直にうなずく。これまで、彼女は、妻として、仙台藩の家老である原田甲斐に夫が入れあげているのを、あぶなっかしいなあ、と恐れていた。巷の噂によれば、仙台藩にはいろいろとおかしなことがあるらしい。だが、彼女は、何事も夫に従う、つつましい妻であったから、その恐れを口に出して言ったことはない。また、彼女は義妹のおくみのことを嫌っていたわけではない。

信助は、日本橋から湯島まで、籠に乗って行った。歩いていける距離かもしれないが、彼は、この帰途、幼いかよを籠に乗せて帰ろうと思っていた。

江戸の街は朝からにぎやかだ。早起きの町の人々が、店を開き、往来している。湯島天神にも、多くの人々がお参りしている。その近くに、原田甲斐の隠宅があった。

甲斐の人柄にほれ込んだ信助が、ここに隠宅を建て、甲斐に恋している妹、おくみを女主人にし、家のかかりはみな自分が負担してきた。だが、今日を最後に、この家は閉じよう、と彼は思った。

そこに着くと、おくみとかよは、ちょうど朝ごはんを食べている最中だった。

信助は、挨拶もそこそこ、単刀直入に切り出した。

「おくみ、かよ、日本橋のわしの家に行こう」

「えっ？ いつ？ 今ですか？」

「今すぐだ」

「そんな、なんで？……」

「なんでかは、わしにもわからん」

「お殿様に何かあったんですか？」

「いや、それも、実はまだわからん」

「……」

「とにかく、早く。早く支度して、この籠に乗りなさい」

「そんな、急に……。何かあったんですね。ほんとに原田のお殿様に何かあったんですね」

「わからん」

「だったら、私、どうしたら……」

おくみは、泣いてしまう。

かよがおくみの胸にすがりついた。

「かあ様、なあに？ 何を泣いているの？ どう様に何かあったん？」

信助がかよを抱き上げた。

「何もないよ。かよが心配するようなことは、何もないよ。さ、早くおじさんの家に行こう」

そして、彼は妹に命令する。

「おくみ、荷物は後で店の者に取りに来さすから、まず、お前たちだけ、日本橋に来なさい」

不安でたまらない妹と、しくしく泣き出した姪とを籠に乗せ、信助は日本橋の我が家に帰った

。

## (2)新しい出会い

信助、おくみ、かよたちに、不安な苦しい思いをさせながら、この年の夏は、過ぎていった。

甲斐は、仙台藩は、どうなったのか？ 幕府や大名家の家の中のことは、町人にはよくわからない。情報量の少ない時代である。噂によれば、伊達家に騒動があり、乱心し朋輩を殺した甲斐はその場で殺され、その息子たちばかりか幼い孫たちまで、公儀に殺されたという。恐ろしいことだ。かよは、どうなるのか？

自分があの密書を渡すのを拒んだら、原田の殿様も殺されずにすんだのだろうか？……とも思い、信助は悩んでいた。

しかし、過ぎたことをあれこれ悩んでも、仕方がない。それより、おくみ、かよ母娘を、どう保護するか？ 信助は、商売上の知り合いは各地に大勢いるが、さて、本心から信頼しあえる友人となると……まず、いないのだった。

おくみは、兄の家において、何不自由なく暮らしていた。兄嫁の千代も、やさしくしてくれる。信助と千代の子供たち、長女ゆり、次女あき、三女ゆかりと、いずれも年頃の娘たちばかりだが、皆、かよを妹のようにかわいがってくれる。かよは、湯島の家にした時より友だちに恵まれ、楽しそうだった。

長女ゆりは、近々、婿養子を迎えて家を継ぐことになっている。相手は遠縁の呉服問屋の次男、健二郎である。ゆりは、婚礼の日が待ちどおしく、うきうきしていた。

「ね、ね、ゆり姉様ったら、健二郎さんのこと、好きで好きでたまらないのよ」と次女のあきが、姉をひやかす半分に言う。

三女ゆかりは、「あたしもお婿さん、ほしいな。お嫁に行くんじゃない」と残念そうに言う。

「そうね。お嫁に行くのと、お婿さんとのとは全然違うもんね」と、あき。

「大丈夫よ。だんなさんを大事にすればいいのよ。そしたら、だんなさんが妻として守ってくれるもん。自分の好きな人と結婚すればいいのよ」と、ゆりが妹たちに教えるように言う。

「かよさんは、一人娘だから、家を継ぐのね」

かよは驚く。幼い彼女は、家を継ぐなど、考えたこともない。だいたい、少女の彼女にもわかるように、継ぐ家など、どこにもないのだ。かよは泣きたくなる。どう様ももういないのだし……どう様は身分の高いお侍だと、かあ様は言っていたけれど……。

「かよは家はないの。あたしもきつとお嫁に行くしかないの」かよはもう泣きそうだ。

「あたしも、家がほしい」

「あら、大丈夫よ。原田のお殿様の家は、かよさんが再興するのよ。取り潰された家は、子供が再興するの」

「えっ、そんなこと？……」

それは大変なことだと、子供のかよにもよくわかる。

「大丈夫、だんなさんがやってくれる」

「そう？……」

「家を興すには、だんなさんの協力が必要だもんね。かよさんを好きで、燃える水を持ってきてくれる人がいつか現れるわよ」

「燃える水？」

「そう。不可能を可能に変える物」

年上のゆりたちは、ふしぎなことを言う。皆、年頃で、結婚というものに、憧れているのだ。

また、このとき、ゆりが『燃える水』と言ったのは、何か仔細があつてのことではなく、彼女がその場の思いつきで言ったことであつたが、かよはそれをまともに受け取ってしまう。

母のおくみは悩んでいた。今が幸せだからといって、このまま、兄のやっかいになつていていいのだろうか？ このままのこの幸せ……ここに安住していいのだろうか？……と、思い悩んでいた。

かよは、もう、父のことは母に聞いたりしない。父のことを口にする、母を悲しませる、と、幼心にもそう感じているのだ。かよは、思いやりのある、親孝行な娘に育つたのだ。

海産物問屋の雁屋の隣には、大きな米問屋の俵屋がある。甲信越の米を一手に扱っている おおだな 大店である。かよは、よくそこへ行き、そこの子供たち、太郎、次郎、花たちと遊んだ。雁屋の娘たちもやさしかったが、何分、年の差がありすぎて、なかなか対等に仲良くは遊べなかつたのだ。年の近い太郎たちとは、いくらでも楽しく遊べた。

そんなある日、かよが俵屋の庭で太郎たちと遊んでいると、そこへ一人のお百姓がやってきた。

「お嬢ちゃんたち、かわいいのう」と彼が言う。

「おままごとだもん」と、おしやまなかよが言う。人見知りしない子なのだ。

「おじちゃんもお客になってくれる？」と、花。

「お客か、それもいいのう」

百姓は、おままごとのごぎに座る。

「ほら、これ、まんじゅう」と、太郎が、泥のまんじゅうを百姓の前に並べる。

「食べて、食べて」

おもしろがる子供たち。

「いやあ、それは勘弁してくだせえ」

百姓は、頭をかきかき、降参する。

かよが聞く「おじちゃんは、ここのお客？」。

「うん。おら俺は、高橋惣左衛門という、越後は長岡の在で、庄屋をしている者だて。今年の新米を運んで来たんだ。長岡の米問屋鈴正の主人があいにく病気で、代わりに俺が米の荷駄隊を組織して、江戸に来たんだて。たまには江戸見物もいいと思つての」

「越後って遠いの？」

「そりゃあ遠いだよ。これからずうっと先の田舎だて。ここへ来る道々、紅葉見物の旅だったな。お嬢ちゃんは、紅葉いっぱい山々は、見たことあるかな？」

「あたし、見たい！」と、かよは目を輝かす。

「そうかあ。けれど、紅葉はもうじき終わつて、今度は雪が降り積もるんだよ。越後は雪国だ。雪が屋根の上まで降り積もつて、そりゃすごいだぞ。お嬢ちゃんはそれも見たいかな？」

「見たい！」

「そうか、じゃあお嬢ちゃんも、俺と一緒に越後に行くか？」

「うん！」

「だけどなあ、お嬢ちゃんのおとつあまやおつか様が許してくれるかなあ」

「あたし、とう様は、いない」

「あ？」

「かあ様なら、いるけれど」

「そうか、じゃ、そのおっか様に言ってみるか。俺の家にも、男の子が四人もおるぞ。男ばかりで、花も咲かねえな。俺は女の子がほしいと思っているんだ」

これは、高橋惣左衛門とかよたちの遊びたわむれであったが、ちょうどその頃、雁屋では、来てほしくない客に来られ、信助も千代もその対応に苦慮していた。

そのお客というのは、武士で、大老酒井雅楽頭の家来だ、と、なのっている。

「ここで原田甲斐の子を、かくまっておろう」と、武士は詰め寄っている。

「わかっておるぞ。そちの妹が原田の側女だったろう」

「はい、それは……」

「隠しおおせるものではないぞ。側女には、子がおろう。その子を出せ」

「しかし、お武家様、おくみの子は、女の子でございます」

「何？」

「原田様の男のお子様たち、お孫様たちは、死をたまわったとお聞きしました。が、女の子様たちは、命はとられていない、とお聞きしましたが」

「そうだ、側女の娘などに用はない。男の子もおろう」

「おりません」

「ごまかしても、わかっておるぞ。そちの妹は、もうかれこれ二十年も原田に仕えておったではないか。二十年も仕えておれば、子供はもっとおろう。娘一人ということは、なかろう」

「いいえ、誓って申し上げますが、おくみの子は、娘一人でございます。私は、妹を原田様にさしあげましたが、その妹にはなかなか、原田様のお手につかず、私も心配しておりましたが、妹は三十歳過ぎて、やっと女の子一人を授かったのでございます」

「しかと相違ないか」

「相違ございません」

「後でそれが嘘とわかると、お前もひどい目にあうぞ」

「はい、わかりましてございます、私ほうそは申しておりません」

武士は、やっと帰った。

「大変ですねえ」と、千代は、ため息をつく。「どうしましょう？ あなた、やはりかよさんたちを、どこかへお預けになったら？」

「うむ。そうだなあ」

と、二人が苦慮しているところへ、かよと俵屋の子供たちが、惣左衛門を連れてきた。

まさに好機到来である。

「かあ様、いる？」かよが言う。「ね、このおじさんがかよを越後へ連れていってくれるの。かよ、行きたい。ね、かあ様は？」

店の奥から、おくみが走り出てきた。

「まあ、あなた様はどちらのお方？」と、惣左衛門にたずねるおくみ。もうじき四十歳に手が届くとも思えぬ、まだまだ美しい女性である。

惣左衛門はボーツとしてしまう。

「俺は、怪しい者ではねえです。お疑いあれば、そこの俵屋さんに聞いてくだせえ。俺は、越後の米を届けに、江戸見物がてら、やってきた者です。越後の片田舎の庄屋で、高橋惣左衛門と申します」

「で、その方が、なぜ？」

いぶかしがるおくみに、惣左衛門は、続ける。



「これはつまらねえことを言ってしまいました。俺はただ、自分には男の子しかねえで、ここのお嬢ちゃんがいとしくて、一緒に越後に行かねえかと、つまらぬことを言いまして、もうしわけなかったです。あなた様のような美しい方に、ご心配をおかけして、すまねえこつてした」

信助と千代は、隣家の俵屋に来ている惣左衛門のことは、知っていた。この人が越後長岡の在の庄屋であることも、三年ほど前に妻を亡くして困っていることも、知っていた。で、信助は、このとき、はっと気づいた。そうだ、そうすればいいのだ。

「あなた様は、奥様をなくされたとお聞きしましたが、後添いの方はもうお決まりで？」

「いんや、俺、独り者だで」

「それは、何かとご不自由のことで」信助は、うれしくてたまらない。

「そりゃあ、俺の家には、男衆も、女衆も、大勢おるんで、野良仕事には困らねえが、家の中を取り仕切ってくれるかかがおらんで、困ってます。それだけでねえて、小さい子が四人もおって、母親代わりになってくれる人もおらんで、ほんに困ってます」

越後の言葉では、「妻」または「母」の意味で、「かか」という。

「で、後添いさんは、やはり越後でお探しで？」

「いんや、俺、江戸のきれいにあかぬけた女子おなごさんたちを見て、もう、江戸の男さんたちがうらやましゅうて。こんなに美しい人たちを嫁にできるなら、俺、何でもしてえです」

「それならば」と信助は一步前に進んだ。

「ここにおります私の妹、おくみをもらってくださいらんか。おくみはきれいでもなく、あかぬけてもないし、若くもなく、その上、かよという娘もおりますが、亭主に死なれて、困っていたんで。おくみ、お前はどうか？」

「はい。私もこれからよその土地へ行って暮らしたいと思っていたところなんです。野良仕事はやったことありませんが、家の中を取り仕切る家政婦の仕事はできると思います」とおくみも言った。

「あっ、あなた様のように美しいお方が、俺のかかになってくださる？ こりゃあ、田舎から江戸へ出てきたかいがありましたなあ」

あつと言う間に、話が決まる。

早い方がいいというので、おくみはさっさと自分たちの荷物をまとめた。

兄嫁の千代が、「花嫁道具一式、後で、高橋様のところへ送りますから」とうけあった。

### (3) 猿ヶ京関所

当時、大名の参勤交代などもあり、街道は整備され、宿場町もにぎわっていた。だが、各地に関所が設けられ、そこを通るには通行手形が必要だった。信助は、町役人に頼んで、おくみとかよの通行手形をもらった。現代の旅券と同じか。

越後には、高崎の宿まで中山道を行き、そこから三国街道に行く。長い旅路である。街道は雪に覆われていた。

高橋惣左衛門の一行は、馬で越後の米を運んできたので、帰りも馬で帰る。大勢の荷駄隊である。途中山賊に襲われぬよう、武装もしている。浪人たちを用心棒として雇ってもある。帰りは、米を売った大切な代金を持っているのだ。

おくみは、おっかなびっくり馬に乗っている。かよは、馬に乗った惣左衛門に抱っこしてもらっている。

どう様よう……と、かよは思う。どう様はめったに湯島の家に来てくれなかったけれど、来たときはいつも、自分を抱いてくれた。やさしい父親だった。

そんな父親のようにやさしい惣左衛門に彼女はすっかりなついていた。幸せだった。

山の雪道を馬で行く。道も、木々も、すっかり雪に覆われている。特に、越後が近づくに連れ、だんだん雪が深くなっていく。寒いけれど、きれいな雪景色。おくみとかよの新しい門出を祝福しているようだ。

さて、一行は猿ヶ京関所に着く。現在みなかみ温泉と呼ばれている宿場の近くである。

関所役人が、荷駄隊全員の通行手形を点検する。おくみとかよのことは、特にくわしく調べる。この時代、「入り鉄砲に出女」といって、江戸に武具を運び込むのと、人質となっている大名の妻たちが国許に帰るのを、特に警戒していた。大名の正室たちも、ひそかに国許へ脱出するときは、普通の女の格好をしているはずだ。だから、庶民の女も、厳重に調べられる。

「そちが、おくみか？ 子はかよと申すのか？」

「はい」

「この一行は、江戸に米を運んでの帰りであろう。女子供を連れて江戸へ上ったのか？」

惣左衛門が、説明する。

「俺は江戸でかかをもらったんでござえます。前のかかは。三年ほど前に亡くなったんで。江戸で、この、おくみ、かよと出会い、年がいもなくすっかりおくみに惚れ込んで、かかにしましたんで」

「その女に連れ子がいたんだな。女、前の亭主はどうした？」

「亡くなりました」

「亡くなった……。そうか、しかし、『貞女は二夫にまみえず』というぞ」

「でも、女は嫁に行かなければ、暮らしていけません。仕方ないんです」

「ほほう、仕方なしにこの百姓の嫁になったのか。女を養わねばならぬ男もつらいのう」

そこへ惣左衛門が割って入った。

「かかがいねえと、所帯を取り仕切ってくれる者がいねえで、俺も困っていたんでござえます。男も女も、どちらも、仕事はきついでござえます」

「そうだな、助けあわねえと、夫婦はやっていけねえな」

「へえ、さような次第で」

と言って、彼は金を少し、役人に渡す。

「よし、わかった。通ってよろしい」

「ありがとうございます」

その夜、一行は猿ヶ京関所近くの温泉宿に泊まった。

当時の温泉は、銭湯も、男女混浴である。もう四十に手の届く年のおくみだが、肌も、まだ、十分に美しい。高嶺の花のように、まぶしい。惣左衛門はこの妻を、女神のようにあがめていた。

「温泉はええなあ」

彼は、越後人なので、「い」と「え」の区別がつかない。

「こうしていると、お前さんを嫁にもろうて、俺はほんに幸せ者だて」

おくみの身体をちら、ちら、と恥ずかしげに見て、彼は言う。

だが、おくみには、言いたいことがあった。

「私は、まだあなたの嫁にしてもらっていません」

彼女の目に涙がにじむ。

「なんで、私だけ、いつもこうなのでしょう？ 原田の殿様のときも、なかなか側女にしてもらえなかったし、今度だって」

「……」

「私は、殿方に相手にしてもらえない、魅力のない女なのでしょうか？」

「そげなことはねえよ。お前様のような美しい人を、誰がほおっておくものか」

「でも……」

「かよがいるでねえか、そんな、いくら子供だって、人前で」

「だって、これまでずうっと旅をしてきて、一度も」

「お前様は高嶺の花なんだな。あんまり美しすぎて、手が出せねえんだな」

「私は高嶺の花なんかじゃありません。生きた、生身の女です」

「うーん」

「嫁にしてもらえないと、私、不安で」

「そうかあ……」

おくみは目の涙を浮かべて訴える。そんな妻を、惣左衛門は、いとしいと思った。泣いている妻に近よって、その肩にそっと手を置く。

## (4) 兄たち

---

冬山を越える長旅の後、一行はようやく越後長岡に着いた。越後平野は、米の収穫もとうに終わって、田も道も白一色に染められている。どこが田で、どこが道か、区別するのも難しいほどだ。

かよは、これまで雪というものをほとんど知らなかった。江戸でも、小雪がちらほらと散ることはあったし、一年に一度くらいはもう少し雪が降ることはあったが、それだけではどうい雪を知っていることにはならないのだ。

そして、これまでしたことなかった長旅のため、おくみもかよもすっかり疲れていた。惣左衛門は、おくみたちの身体をおもんぱかってできるだけゆっくり時間をかけて進んできたのだが。

越後の冬。長岡の米問屋鈴正に着いて、彼は、預かっていた米の代金を主人に渡す。鈴正の主人は、病気も治って、元気に店に出ていた。荷駄隊は、ここで解散し、用心棒たちも、それぞれの家へ帰る。

「ここにおるのが、俺の新しいかかと、娘でござえます」

と、惣左衛門は、鈴正の人たちに、おくみとかよを紹介する。

「あれまあ、お前様は、江戸で嫁御と養女まで見つけてきなさったんかね？」

「へえ、まあ、そうで」

「それは良かったのう、たまたま俺が病気で」

「えっ？」

「それじゃって、俺が病気で、大切な米を江戸へ運べねえんで、お前様に代わりに行ってもらって。そこで、お前様は新しい家族を見つけなさったんだ」

「俺、日頃の精進がいいからのう」

「んだ、んだ」

「まあ、こんな寒いときに」

と、鈴正の夫人が、自分の羽織を脱いで、かよに着せ掛ける。

「寒かったでしょうに」

「あ、ありがとうございます」

と、おくみは、夫人に礼をする。実は、彼女は、かよが風邪をひかないかと、それが心配だったのだ。彼女も、娘のかよも、暖かい江戸で着ていた着物しか着ていなかった。越後は寒いのだ。

それで、惣左衛門とおくみ、かよたちは、まず長岡の呉服屋に行き、冬の着物を調える。道すがら、じっと寒さに耐えていたのだ。

風が、出てきた。

「早くしねえと、吹雪になるなあ」

三人は道を急ぐ。

高橋の庄屋屋敷は、信濃川水系の支流の一つ、貝喰川のほとりにあった。ここで、皆が主人の帰りを待ちわびていた。

長男壮太郎十六歳、次男慎次郎十三歳、三男東三郎九歳、末っ子の四男正四郎七歳。正四郎だけ、かよより年下である。子供たちの母親は、三年前に病死している。で、母親はいないが、四人の子供たちには、それぞれ乳母がついている。

あと、番頭一人、男衆が五人、女衆が五人。女主人がいないため、壮太郎の乳母であるおなか、一応、代理で、家を取り仕切っている。

壮太郎がもう大きいので、おなかは、この家からひまをもらって、長岡の自分の家族の許に帰りたい、ついでには後顧の憂いもなきよう、早く後添いをもらってほしい、と主人の惣左衛門に言っていた。

男衆たち、女衆たちは、田畑が雪で野良仕事ができないため、土間でせつせとわらをなう仕事をしている。

さて、惣左衛門がおくみとかよとを連れて家へ着くと、息子たちが、「わああ一つ」と我勝ちに駆け寄ってきた。

あ、見慣れぬ女の子がいるぞ、と気がついて、皆、びっくり。

「こんにちは！」

と、かよが、自分から子供たちに挨拶する。

「お前<sup>め</sup>、どこから来たんだ？」と、壮太郎が彼女に聞く。

「あたし、月の国から来たの。かぐや姫なの」

「かぐや姫だと？」子供たちがきよとんとする。

「そう、竹から生まれたかぐや姫。竹取物語にあるでしょ」

「竹取物語だと？ 俺は知らねえ」と壮太郎が言う。

「もしかあんにゃ、お前、知っているか？」と、慎次郎に聞く。

「俺も知らねえて、あんにゃ」と答える慎次郎。「おじ、お前、知っているか？」東三郎に聞く。

「俺も知らねえ」と東三郎。

小さい正四郎は自分から言う、「俺も知らねえ」。

「そうか、かすおじも知らねえか」と壮太郎。

ここでは、長男は跡取りなので、「あんにゃ」と呼ばれ、次男は、この長男にもしものことがあると代わって跡取りになるので、「もしかあんにゃ」と呼ばれている。三男以下は「おじ」だが、末っ子の四男はいてもいなくてもいい存在なので、かわいそうなことに「かすおじ」と呼ばれている。

しかし、三男も四男も、うじうじしていない。庄屋の息子ならどこへでも養子に行けるし、それではなかったら、新しく土地を開墾すればいいのだ。

「お前、いくつだて？」と、壮太郎がかよに聞く。

「やつつ」

「八歳か。竹取物語とか、そういう本、好きか？」

大好き」

「ふーん。勉強が好きか？」

「好き。でも、かあ様に教えてもらっただけ。まだ、寺子屋にも行ってない」

「俺は、寺子屋に行ってるぞ。おとつつあまが、勉強しろ、勉強しろ、とうるせえんだ」

「へーえ」

そこへ、慎次郎が割り込んで言う。「おとつつあまは、俺にも、東三郎にも、正四郎にも、勉強しろ、勉強しろ、とうるせえんだ。だども、野良仕事もあるすけ、忙しいんだ」

「野良仕事もやるの？」

「うん、今、新しい田を、開墾しているんだ」

「へーん、開墾ねえ」

かよは、このあんにやともしかあんにやを、尊敬する。

この時代、日本各地で、新田開発が盛んで、どんどん行われていた。長かった戦国時代が終わり、切れ味のいい刀を作る技術を磨いた鍛冶屋たちが、今度は良く切れる鍬や鎌、鋤を作った。やっときた平和な時代。領主たちも、この新田開発を奨励した。

しかし、山を切り崩しすぎると、今度は水害がおきてしまう。そのため、江戸時代も後期になると、開発より本田をよく耕作することが優先されるのだが。

## (5) 新しい家族

---

冬である。

毎日、屋敷の前の道の雪かき、屋根の雪下ろし、すべて雪国ゆえの仕事がある。半年間も越後は雪の中。何もできない。上杉謙信が天下を取れなかったのも、この雪のせい、雪国の運命だったのかもしれない。

「わあ！」

と、雪かきをしながら、男の子たちが庭にめいめいの雪だるまを作る。

「すごいぞ、俺の雪だるまだ」

「いんや、こっちこそすごいぞ。俺の雪だるまだ」

四人はそれぞれ、自分の作った雪だるまを自慢する。

「かよ、お前も雪だるま、作れや」

「雪だるまって、あたし、そんな……」

かよは生まれて初めて雪だるまを見たのだ。手が冷たい。

「ほら、ほら、嬢ちゃま、この手袋をしなせえや」

と、慎次郎の乳母・さえが、かよに絹で作った手袋を渡す。

「ええなあ、俺の手袋など、わらで編んだやつだぞ」

慎次郎は口をとがらす。

「ばあや乳母、どうして俺には絹の手袋をくれねえんだ？」

と、ごねる。

この時代、絹はまだ貴重品であった。

「もしかあんにゃ様、おなご女子は大事に絹でくるんであげるもんですて」

と、さえ。

「ふーん」

慎次郎はなおも口をとがらし、かよに向かう。

「かよ、その手袋、ちっと俺に貸してみてくんろ」

「え……」

かよが渡すと、

「わーい！」

と慎次郎は両手にその手袋をはめて、ぐるぐる踊りだす。彼のわらの手袋は雪の上に放りだされたまま。

「あーん！」

手袋を取られたかよは、泣き出す。

「なんだ、弱虫め！ これぐらいで泣くな！」

彼はポンと手袋を彼女に投げつける。

びっくりして、にこにこする彼女。

「ああっ、さっき泣いたカラスが今笑うた」

と慎次郎は。かよをひやかしながら、なおも踊る。

そして遊びばかりではない。冬の間、子供たちは寺子屋に通い、知識を得る。高橋家の四人の子供たちと、かよは、一緒にそこへ通い、勉強した。かよは、勉強がよくできた。四人の男子たちは、どうていかよにかなわない。また、かよは、母のおくみから針仕事や料理を習い、これも難なくこなした。

「楽しみじゃのう、かよはよくできるのう、嫁にしたら、良い子をたくさん産んでくれるじゃろう」と惣左衛門。

「かよを、この家の嫁にするおつもりですか？」と、おくみ。

「そうじゃ、不服か？」

「いえ」

「この家には、四人も男子がおるのじゃ。かよを他家にくれてやることはあるまい」

「そりゃあ、そうですね」

「ところで、また、男か？」

「いえ、まだ、それは……」

おくみは、身ごもっていた。

「女の子がええなあ。俺も自分の血を分けた娘がほしい。

かよは利発すぎてなあ、俺はとても……。かよのあの頭の良さは、<sup>ててご</sup>父御の血をひいているのじゃろう。かよの父御は、立派なお侍だったのじゃな」

「……」

「いや、やきもちをやいているのではねえ。かよは、この家に、人々の上に立つ、すぐれた資質を与えてくれるじゃろう。また、お前が女の子を産めば、お前の血を引いた美しい女性がこの家に加わるのだ。めでてえなあ」

惣左衛門は、甲斐のことを、うすうす感づいていた。おくみは、そんな夫を今は愛している自分を発見する。

春が来て、雪が解けた。

子供たちは、外で遊びまわる。雪国の早春はすばらしい。

雪道を慎次郎ととんとん飛び跳ねながら歩いていて、ふと、かよは気づく。

「ねえ、この音、なあに？ 何の音？」

ちよろちよろと流れる水の音がする。

「ここに小川があるのかな」

慎次郎が笑う。

「この雪の下で、とけた水がちよろちよろと流れているんだ。雪は下からもとけるんだよ」

「へーえ。もしかあんにやって、何でも知っているのね」

「みんな、さえから聞いたんだ。おれの乳母のさえは、とつても物知りなんだぞ。かよも何でもさえに聞くといいぞ」

「へーえ」

ところで、あんにやの乳母・おなかは、惣左衛門に後添いが来たので、ひまを取ろうと思っていた。しかし、そのおくみが懐妊し、仕事がまた増えてしまった。なかなかひまが取れない。



産まれてくる子の乳母も、雇わなければならない。村のかかたちの中に、現在妊娠中の女はいないか？……しかし、これは、ただ乳が出ればよいというわけにはいかない。やはりそれなりの教養がなければ。

村には適任者がいなかったのので、惣左衛門は、長岡の鈴正まで出向き、相談した。

鈴正の主人が紹介してくれたのは、夫に死なれ、妊娠中の身をなんとかしようと、口入れ屋に乳母の口を頼んでいた、お春という名の後家だった。読み書きもできるし、料理も針仕事もできる、心やさしい女性だった。惣左衛門はさっそく彼女を連れて家に帰る。ここで、おなかと、慎次郎の乳母・さえとは、ひまを取って、それぞれの家に帰った。

春から秋にかけては、男衆、女衆は、田の仕事をし、開墾もする。この人たちのための毎日の食事作りも、忙しいのだ。大家族の家の仕事は、野良仕事よりも楽かもしれないが、これはこれで大変だった。

秋、稲の収穫ができた頃、おくみは玉のようにかわいい女の子を産んだ。惣左衛門は、この子を、ゆみ、と名づけた。

「ま、四十の恥かきっ子ですて」

と、彼は、知人たちにうれしげに語る。幸せな家族であった。

## (6) 貝喰川

越後平野は、日本海に向かって、信濃川と阿賀野川という二大河川が流れ、これらの支流、分流が、数多く流れている。この数えきれないほどたくさんの川のうちに、貝喰川があった。国境いの山脈から豊かな富を運んでくる川である。ここに、高橋家の先代が開墾した貝喰新田かいぼみしんでんがあり、庄屋・高橋惣左衛門の屋敷があった。

夏、野良仕事が一段落すると、高橋家の子供たちはこの川原で水遊びする。かよも一緒だ。豊かに流れる川と、青い空。暑い夏もまた楽しい。かよは、十三歳になっていた。

「ここには、貝がいっぱいあるんだ」と、慎次郎が川原で貝を探しながら、かよに言う。

「ほら、これがオオタニシ。タニシに似ているだろ」

「これ、食べられるの？」

「さあな。でも、昔の人たちは食べたんだろ。土地の名が貝喰っていうくらいだから。飢饉のときは食べるのかな」

そしてまた、彼は探す。

「あ、これは、カワニナだ。俺、物知りだろ？ 何を隠そう、みんな、乳母のさえが教えてくれたんだ。さえは、物知りなんだて」

「あたしも、探す！」と、川原でかよも貝を探すが、なかなか見つからない。

「ほら、かよ、鬼ごっこしようぜ！」

と、慎次郎が遊びだす。

「鬼ごっこする者、よつといで。じゃんけんぽん、あいこでしょ、ほら、俺が鬼だ。かよを食っちゃまうぞ！」

追いかける慎次郎、走り逃げるかよ、川の浅瀬へ向かって行って、

「ああっ！」

と、川に落ち、

「あっ！ あっ！ あっ！」

溺れかかる。

「かよ！」

慎次郎があわてて駆け寄る。

「かよ！」

と、近くを泳いでいた壮太郎も来る。

「ほら、ほら、ここにつかまって！」

慎次郎が手を出し、かよを引き上げようとする。

壮太郎もかよを川の水から外へ出そうとする。

飛沫が飛ぶ。

長男と次男、二人ががんばって、かよを救う。

「あーん！ あーん！」と泣くかよ。

兄たちは二人でかよを抱き、なだめる。

「大丈夫だて。もう溺れてねっから。助かったんだて」

「俺たちが助けたんだ。さ、早く家へ帰って、おっか様に違う着物を出してもらおう。これでは、水に浸かって、びちょびちょだからなあ」

屋敷に帰ると、おくみが出てきて、

「まあ！」と、目をまわす。

「かよ、溺れたん？」

「あーん！ あーん！」かよは泣き続ける。

「だめじゃないの。もう大きいんだから、気をつけなければ」

高橋家では、長男の壮太郎がいかにも総領息子らしくおっとりとしていて、次男の慎次郎は、これもいかにも次男らしく、はしっこい。

父親の惣左衛門は、長男に家を継がせ、次男は分家させ、現在開墾中の高橋新田の主人にするつもりだった。

しかし、養女のかよは、どうするか？ かよは、長男の嫁にするのが、一番なのだが。

おしゃまなかよと、はしっこい慎次郎とは、似た者同士で仲が良い。

彼女より数えて、壮太郎は八歳年上、慎次郎は五歳年上、三男東三郎は一歳年上、四男正四郎は一歳年下である。年齢だけで考えれば、かよはどの男子にも似合いの嫁である。

そのかよは、まだ少女だが、もう二十一歳にもなる壮太郎のことも、考えてやらねばならない。平たく言えば、もしもかよが慎次郎の嫁になりたいのなら、壮太郎の嫁は、どこかで探してこなければならない。

そのかよは、ある朝、寝室の隅で、寝巻きのまま、しくしく泣いていた。

「かよ、何を泣いているんだて？」

泣いている妹に、慎次郎はやさしく語りかける。だが、彼女は、しくしく泣き続ける。

「何をそんなに泣くんだて？ 誰かにいじめられたんか？」

しきりに聞く慎次郎を止めたのは、幼い妹・ゆみの乳母であるお春だった。かよには乳母がないので、お春がそれを兼ねていた。

「なーんにも、心配のこと、ねえですて」

「だって……」

「ほんに心配いらねえんですて。男さんにはわからねえことです。かよ様、もう泣きなさんなて。俺が教えてあげますて。かよ様は、病気でもなんでもねえ、女なら誰でも一度は通る関所ですて」

かよの寝巻きに血が付いていたのを、お春はちゃんと見ていた。

おくみも、そばへ来て、微笑する。

「そら、お春の言うように、泣かなくてもいいのよ。かよも、女になったのよ。今夜は、お赤飯を炊こうね」

「そうですね、男衆、女衆にも、久しぶりにお赤飯炊いて、お祭りしましょうて。かよ様が女になったお祝いですて」

おくみや乳母たちの仕事で、その日の夕食は、赤飯とごちそうになった。

「良かったですのう、かよ様」

男衆、女衆も、彼女を祝福する。

「んだで、かよ様は、あんにゃ様のお嫁になるんですかろう？」

「知らない」かよは恥ずかしくて、奥に隠れてしまいたいようだ。

「ほんに、あんにゃ様は、良い嫁御がおって、幸せですのう」

それを聞きつけた慎次郎が怒る。

「あんにゃの嫁でねえ。俺の嫁だ」

「えっ？ もしかあんにゃ様も、かよ様を嫁にしてえんですか？」

「そうだ」

「そりゃあ、難しいこってすな。かよ様は、二人の男にほれられて、幸せですなあ」

と、男衆は、そんなことを言っているが、主人夫婦は、このことで、困っていた。かよは、壮太郎の嫁になる気はないのだろうか？

「弱ったのう……。俺はかよを長男の嫁にするつもりでいたんだが、慎次郎もかよを好いているのか？」と、惣左衛門が言えば、

おくみも「そのようですねえ」と、ため息をつく。

「いったいどうすればいいのかのう？」

「それは、本人の気持ちを聞けばいいんじゃないですか？」

「本人？ 本人って、かよのことか？」

「ええ、ここは、本人の気持ち次第でしょう。私は、かよには、自分の好きな人と一緒にさせてやりたいです」

「そうか、じゃあ、お前さんからかよに聞いてみてくれ」と、父親は、母親に指図した。

## (7) 真間の手児奈

おくみは、途方にくれてしまった。かよは、あんにゃと、もしかあんにゃの、同時に二人の嫁になりたい、と言うのだ。

「だって、あたしが溺れかかったとき、あんにゃと、もしかあんにゃとが、二人で協力して、あたしを助けてくれたんだもん。そのどちらかの嫁になれ、って言われても、そんなこと、あたしにはできない」というのが、かよの言葉。「今まで兄妹として三人で楽しく暮らしてきたんよ。それを、なぜ、続けちゃいけないの？」これがかよの理屈。

おくみは困りはてた。初潮を迎えたばかりの娘に、性教育をしなければならない。

「兄妹と夫婦とは、全然違うの」

「どうして？」

「どうしてって……結婚すると、夫婦には子供ができるの。かよさんの言うように二人と結婚すると、生まれた子供の父親が二人のうちどちらか、わからなくなるじゃない。子供の父親がわからないなんて、どうするの？ 困るでしょ」

「ふーん」

「やはり女は自分の好きな人の嫁になるのが、一番よ。かよさんは、どちらが好きなの？」

「どちらも、好き」

「好きって言ったって、好きにもいろいろあるでしょ。兄のように慕うとか、嫁になりたいとか」

「それは、違うことなの？」

「そうですよ。まるで違うことですよ」

「かよには、わからない」

わからない……。きつとかよにとっては、壮太郎も慎次郎も、兄として慕う存在なのだろう。彼女ももう十三歳、秘かに恋する人がいても、ふしぎはない年齢なのだが、きつと奥手なのだろう、まだ恋は芽生えていない。母として、おくみは困ってしまう。

「これでは、真間の<sup>ま</sup>ま<sup>て</sup>こ<sup>な</sup>手児奈になってしまいそうで……」と、彼女は夫に相談する。

「真間の手児奈？」

「はい、昔、下総の国の市川真間に、手児奈という美しい娘がおりまして、大勢の男の方たちに求婚され、その中の誰も選ぶことができず、井戸に入って死んでしまうのです。きつと、かよさんは、壮太郎さんの嫁になれば、慎次郎さんが悲しみ、逆に慎次郎さんの嫁になれば、壮太郎さんを不幸にする、とって悩んでいるのでしよう」

「弱ったなあ」

「はい、どうしたらいいか……」

すっかり悩んだ惣左衛門は、二人の息子たちを呼んで、言った。

「お前たち、ここですもうをしろ。すもうで勝った者の方に、かよを嫁にやろう」

「すもうだかね？」

と、壮太郎は自信がなさそう。

「うん、そりゃ、俺が勝ちますて」

と、慎次郎の方は、すっかり自信に満ちている。

両親は、家の者たち一同を庭に呼び、そこで二人の息子たちに、すもうをさせた。もちろん、東三郎と正四郎とは、「おじ」や「かすおじ」の自分たちは、相手にされず、おもしろくない。仕方ないので、東三郎はあんにやを、正四郎はもしかあんにやを、応援する。

「はっけよい！ そら、残った！ 残った！」

番頭の義助が行司を勤める中を、恋敵の兄弟は、全力ですもうをとる。そらっ！ そらっ！ そらっ！

いつもは何かと慎次郎に負けている壮太郎だが、このときばかりは必死だった。もちろん慎次郎も負けるわけにはいかない。

「そらっ！ そらっ！ そらっ！」

とうとう勝ち負けのつかない引き分けになってしまう。

ふうーっと、二人はそこにへたばってしまう。

惣左衛門は、困り果てた。「弱ったなあ。すもうでも勝負がつかねえとすると、どうしたらいいのかわかる？ かよ、お前、どうする？」

かよは、涼しい顔をしている、「あたしは、かぐや姫」。

「かぐや姫？」

「そう。月の国に帰るかぐや姫。月に帰したくないなら、燃える水を持ってきてくださいな」

「燃える水？」

皆が、いぶかしがる。

「ええ、あたしは、その燃える水を持ってきてくれた人の、嫁になります」

と、かよは、雁屋のいところ、ゆりの言っていた言葉を思い出して言う。

「水は燃えねえです」

と皆が言う。

「いえ、これから雪が降って、解けた頃、燃える水を持ってきてください」

「わーん」

と、一同はびっくりし、それ以上、言葉もない。

いくら自分が美人だからとて、ありもしない物をほしがって、男を困らせる。自分からかぐや姫だ、などと名のる。まるで高慢ちきではないか。

しかし、二人の兄たちは、妹の言葉に賛同する。

「わかったて。俺たち、これから旅に出て、燃える水を探してくるて。待っていてくたせえ」

と二人は同じように言う。

で、親たちも、これを認めるほかなかった。冬が来て、雪の降り始める頃である。農作業のあるときなら、息子たちをそんな遊びみたいなものに出さないが。

壮太郎と慎次郎とは、一緒に長岡の町まで出た。町に着いて、慎次郎は「俺、これから乳母の家に行ってみるて」と言う。

「それじゃあ、俺も、自分の乳母のところに行ってみる」と、壮太郎も言う。

そうして、二人は、長岡から、それぞれの乳母の許をめざして、別れた。

## (8) 生きる

---

おくみの産んだ惣左衛門の娘・ゆみも、もう三歳になっている。父親の期待通り、幼児ながらかわいい子である。

長男と次男が『燃える水』探しに旅に出たので、家には三男東三郎と四男正四郎と、ゆみの三人の子供たちが残った。

「あんにゃも、もしかあんにゃも、ええなあ。あねさがいて。俺たちには好いた女もいねえし」と、東三郎がませた口をきく。子供たちは、かよのことをこの地方の慣習に従って、『あねさ』と呼んでいる。

「んだ、んだ、俺たちもあんにゃたちみてえに嫁争いをしてえなあ」

と、正四郎もなまいきに言う。

そこで、ゆみがしゃしゃり出る。

「あたしがおるで」

「えっ？」

「あたし、おじか、かすおじかの嫁にしてみらうて」

二人の男子は驚く。

「そんなことはできねえ」

と、東三郎。

「んだ、んだ、そんなことはできる道理がねえ」

と、正四郎も言う。

「どうして？ どうしてあたしはおじたちの嫁にはなれねえの？」

「ゆみは、よその家に嫁に行くんだ」

「えっ？ あたしだけどうして？」

「俺たち、兄妹だろ？ 兄妹は結婚できねえんだ」

「えっ？」

「うそだと思ったら、おっか様に聞いてみな」

おじたちに拒絶されたゆみは、泣き泣き母のおくみに事の次第を訴える。おくみは、またもや、娘に性教育をしなければならない。それも、まだ赤ん坊みみたいな末娘にも。

「あのね、兄さんと妹とは、もともと結婚できないの。だからゆみも東三郎さんたちの嫁にはなれないの」

「兄さんと妹って……あんにゃたちと、あねさも、兄妹でねっか」

「そうね。でも、かよさんは私の産んだ子だけれど、ほんとの父親は違う人なの。ゆみは、私とここのとう様との子。東三郎さんや正四郎さんたちとは、母親は違うけれど、父親は同じでしょ。父親、母親のどちらか一方でも同じなら、血のつながった兄妹だもん、結婚はできないの」

「ふーん」

まだ幼いゆみには、難しい話だった。

「父親って、とう様のこと？……じゃ、あねさのとう様はどんな人なの？」

「それは……立派な方だったわよ。立派過ぎて……」

おくみは、泣いてしまう。かよの父親……。日々の喧騒のうちに忘れかけていたその人のことを、彼女は思い出してしまう。

殿様はあれから、どうなさったのだろう？ あの世で、正妻の奥様と一緒にいらっしゃるのだろうか？

お殿様と、私と、かよと、この三人で一緒に暮らすことはできないのですか、と私は詰め寄ったこともあったけれど、あの方は拒絶なさった。そういう家庭の幸せは、かよにさせよう、自分たちにはそれは、できない、とおっしゃった。

家族と一緒に暮らす幸せ、社会の中の小さな片隅にある家庭の幸せ……その小さなものこそ、人として持てる最高の至福ではないか、それを守ることこそ、大事ではないか、とおくみは思ったが。

お殿様は、そうは思われなかった。おくみにはよくわからないけれど、あの方は、自分一人の幸せではなく、大勢の人たちの幸せを守らなければならなかった……仙台藩の多くの人たちを守って自ら犠牲になられた……。

人はいつか別れ、いつか一人で死出の旅に出るのだ。その時、臨終に際して、ああ、自分の一生はこれだった、と満足して死ねるのか、否か。人々のために、自分のやるべきことをやって、満足して死ぬ。現在と未来の人々のために……と、彼女は、この頃、ようやく甲斐の心が、うっすらとではあるが、確実に、理解できるようになっていた。

そして自分も、現在の夫と、六人の子供たちのため、この小さな幸せを守って、生きよう……と彼女は思う。人にはそれぞれ天から与えられた使命というものがあるのだ。そのことを忘れてはならない、と彼女はその思いを心のうちにたたみこむ。おくみは、しなやかに美しい女性だった。



## (9) 草生水

---

「ま、ま、高橋のあんにや様！」

と、訪ねてきた壮太郎を、元の乳母のおなかは、驚いて出迎えた。

「こげに貧乏な家に、よう来てくださって」

と、歓待する。

「あんにや様、久しぶりですのう」

乳兄弟の万助とも、ほんとうに久しぶりの再会だった。

おなかは、万助を身ごもったときから、高橋家に奉公に行き、我が子・万助と、高橋家の総領息子・壮太郎とに、乳を与えた。壮太郎と万助とは、仲の良い乳兄弟だったが、二人がともに十歳になったとき、万助は一人、自分の父親の許に帰った。そのとき以来の乳兄弟の再会である。

「あんにや様、何か用がおありで？」とおなかは聞く。「まさか、用もねえのに、ただ俺たちに会いとうて来てくださったのではねえでしょう？」

「うん、実は……」と、壮太郎は話を始める。

「おっか様の連れ子のかよだが、俺、かよを嫁にもらいとうて。が、弟の慎次郎もかよが好きで、俺たち、すもうに勝った者がかよをもらえるんだったが、そのすもうで勝ち負けがつかず、でもって、燃える水を持っていった者が勝つことになったんて」

「燃える水って、それ、何ですて？」

「うん、実はそれが、俺にもわからねえ。かよが、それを持ってきた者の嫁になるって言うんだ」

「へええ？」

「お前たち、知らねえか？ 燃える水って」

「さあ、知らねえなあ」と万助が言う「そんな物を持ってこいって、そのかよ様って子も無茶なことを言うのう」

「うーん」

おなかは続ける「まあ、しばらくはここにおりなせえ。しばらく考えたら、また良い思案もわくかも知んねえし。俺は、貧乏人の子だくさんで、困っていたとき、高橋のだんな様にあんた様の乳母にしてもろうて、ほんに助かりましたて。そのときのご恩は、いつぺんも忘れたことありませんて。なんぞご恩返しができればええんですが、俺たちは学がねえで、もうしわけねえです。ま、今日は菜種油がいっぱい手に入ったで、久しぶりにてんぷらでもあげますて。野菜のてんぷらで、もうしわけねえけれども」。

と、おなかは、鍋に油を熱して、てんぷらをあげる。

「ああっ！」

鍋に火が入った。

燃え上がる炎。

あわてて鍋にふたをかぶせ、火を止めるおなかと万助。

「あっ、これだ！」と、壮太郎はひらめく。

「これだ！ これが、燃える水なんだ！」

「なあんなて、あんにゃ様、これは水でのうて、油でござえます。菜種油でござえます」

「しかし、水みたいに見えるぞ」

「そうですかあ……水には見えませんがのう」

「いや、水だ。水だ。燃える水だ。なあんだ、これで良かったんだ」

壮太郎は、おどりがあがって喜ぶ。

で、早くも課題をはたした彼は、雪の解けるまで、おなかの家でごろごろしていた。

雪が解けた。

でもまだ雪が少し残っている高橋家の庭で、壮太郎と慎次郎とが、それぞれの持ってきた燃える水を、披露する。一家の者たち、総出である。

庭の真ん中にしつらえられた大鍋に、壮太郎はおなかの家から持ってきた菜種油をそそぐ。火をつけると、油は燃えた。

「おおっ！」と、皆、感嘆する。

その油が燃え尽きた後、慎次郎は落ち着いて、自分の持参した水を、鍋に入れる。

「危ねえ、危ねえですから、皆、遠くに離れていてくだせえ」

と、皆に注意し、自分も十分気をつけて、慎次郎は火をつける。

と、

「おおっ！」

燃え上がる炎。

臭い匂い。

人々がこれまで見たこともない炎である。火事になりそうだ。

「消して！ 消して！ 消すにはどうするの？」女主人のおくみがあわてる。

慎次郎が、あわててかけようとする母を制し、皆に言う。

「あわてなさんなて。燃え尽きるまで、待たねば。これは、<sup>くそうず</sup>草生水というて、恐ろしく燃える水なんです。俺は、乳母のさえから聞いて、柏崎まで、雪の中を探しに行きましたんで。雪の中をえれえ苦労して、やっと見つけたんで。これはよく燃えるが、臭いのが欠点で、それで草生水というんだて」

燃え尽きて、炎が消えた。

「もしかあんにゃ！」と、かよが慎次郎に駆け寄る。

「かよ！ 俺の勝ちだぞ！ 俺の嫁になれ！」

うれしい慎次郎。

無然とする壮太郎。

「ああ、良かった、良かった、これで万々歳だ」

一同、喜びにわく。

これが、この一家と石油との、初めての出会いだった。

